

月刊・神戸 1980/2

# 読書アラカルト

- 一冊の本 (1~2ページ)
- 銅は奈隆氏のごと (3~4ページ)
- 郷土誌の恋 (5~6ページ)
- 言葉について (7ページ)
- '80、釣(キ)アラカルト (8~9ページ)
- 海文堂2月のフェアご案内 (10ページ)
- 校正クイズ (11ページ)



海文堂書店発行

〒650 神戸市生田区元町通3-146

NO.  
3

# 一冊の本

ふと海文堂をのぞくと、PR用らしい印刷物が目についた。

題して「古書店<sup>講</sup>歌」という。

新刊店らしからぬ、このいささかへソ曲がりな見出しにつられて読み出すと、中々どうして面白い。

カビくさい古本屋独特の匂いから変屈そうなオヤジの表情まで、余すところなく活写されている。

とりわけ、絶版になっていてこれまで一度もおめにかかれなかった叔父さんの本に、偶然めぐりあったいささつのあたりなど、まるでラムのエリヤ随筆を読む思いがした。

<sup>奇</sup>遇に驚かされたのは筆者である海文堂の島田さんばかりではなかった。

わが愛してやまぬ一冊の本、島田巽著「ふだん着の英国」(昭和30年「暮しの手帖社」刊)が、こんなところで話題に上ろうとは、私自身、全く予想もしていなかったからである。

花森安治とい<sup>え</sup>ば、戦後の出版<sup>界</sup>に一新記元を画した、異色ある人物であった。

本書は、彼が世に送り出した「暮しの手帖社」の出版物の中でも、間違いなく傑作の一つである。

ツイードを思わせる布袋のその本は、全体が渋い茶系統の色調でまとめられ、瀟洒ではあるが、決して派手な人目を引くものではなかった。

だが、何気なく本文を開いた私は、一瞬、息をのんだ。

薄くクリームを帯びた用紙と、美しい活字との、何というみごとな取りあわせであろう。

昭和30年といえば、戦後漸く十年、世間はまだまだ粗悪な活字の横行をゆるしていた時代である。

目を洗われるような衝撃を受けたことを今も鮮やかに記憶している。

私は最近になって、著者の島田氏からその間の事情を聞かせていただき、25年ぶりで疑問を氷解することが出来た。

最初この本の印刷は、暮しの手帖社出入りの業者によって進められた。その印刷あがり余りにもみにくいのを激怒した花森は、既に三校に入っていたにもかかわらず、急

遽、業者を岩波書店のそれに代えさせてしまい、おかげで島田氏は、改めて始めから校正のやり直しということになったそうである。

ややもすると奇矯な伝説を伴ないがちであった花森という人が、いかに造本に対して潔癖な執念を燃やしていたか、また、島田氏の著書が当然それに価して余りあるものであるかということ、この一事は如実に物語るものといえよう。

「ふだん着の英国」は、島田、花森の両氏が丹精こめて醸成した希代の美酒である。時を重ねるごとに、スコッチのようにいよいよ芳醇さを増していくのも不思議ではあるまい。

群を抜いてアカヌケしていた印象も、奇しくも両氏がそろって神戸の出身と知れば、おのずから納得がいった。

ただ何としても残念でならないのは、本書が絶版となり容易に入手出来ぬということである。

森嶋通夫氏や木村治美氏の著書が評判となり、英国紹介の本がブームを呼んでいる今日、尽きることのない慈味をたたえた本書の再版を望んでやまないのは私1人であろうか。

もっとも、島田氏は静かに微笑を浮かべて巻頭をさしながらこうおっしゃるかもしれない。私の答えは、もう、とうに。この本に出ていますよと。

— 英国人の7つの癖のうち、第1は《控え目であることを好む癖》である —

(田中 稔)

(記)  
(付)

- (1) 田中稔氏は、兵庫県立兵庫高校教諭。
- (2) 「古書店讃歌」は昨年4月16日付「週刊神戸読書アラカルテ」に掲載された。
- (3) 島田巽氏は、元朝日新聞論説副主幹。「ふだん着の英国」は絶版ですが、現在入手しうる著作としては「山、人、本」(昭和 年、茗溪堂刊)がある。  
また、大修館書店より刊行中の「小島<sup>クスイ</sup>烏水全集」の編集委員をつとめている。

## 朝比奈 隆 氏 の こ と

年末になると不思議と、日本各地では、毎夜毎夜、何処かで、あるいは何ヶ所もで、ベートーヴェンの第9交響曲が鳴り響く。何度も日本だけの特異現象と指摘されながら、おさまるところか、増々盛んになり、それぞれの演奏会場が満員というのだから、驚くばかりだ。

大阪フィルハーモニーだけで、1ヶ月の間に驚くなかれ21回も演奏するというのだから、毎回~~毎回~~質の高い演奏が続けられる筈が無い。自分の切付を買った日の演奏の出来ばえなど、宝くじに当るぐらいの確率でしか期待しえないのに、人は12月は「第九」へ行く。何故、12月に「第九」をやり、何故人々は、それに群るかを、社会心理学的に分析するのは、この項の目的では無いので、触れないが、何をかくそう、小生も、20年来の「年末第九派」(もっとも、日本では12月以外に第九が演奏会のプロにのることはまず無いが)である。最初の5年ばかりは、アンノン族風に、次の8年ばかりは、コーラスのメンバーとして、京響、大フィルと共にステージに、最近の7年は、コーラス仲間や、大フィルの友人に会える楽しみにひかれて客席にと、折々の理由づけはあるにしても、平均的日本人風に「第九」とお付き合いしてきた。

細部をぐだぐだいえば、キリも無いが、今年の演奏は「宝くじ9等当り」の演奏であった。あとから聞けば、おかしな話したが、大フィルの面々、次の日が、久し振りの「第九休み」で、かえって気分が乗っていたとか……。この「アラカルテ」の読者には、恐ろしい音楽評論家の先生がおられるので、うかつなことは申せぬが、終始一貫「真摯なる凡庸さ」を追い続けた演奏で、ハッと心を揺るような新鮮なときめきの瞬間は決して訪れず、一年間私の記憶の整理棚へしまい込まれていたスコアが、記憶と寸分のたがひも無く引き出されてきたという、武骨なまでの凡庸さがあってだけで、いってみれば、誠に平々凡々であるが、それが「真摯なる凡庸さ」であることが、指揮者、朝比奈隆さんの真骨頂ではあるまいかと、演奏をききながら、ひたすら思った。

関西という、音楽的にはマイナーな土地柄でありながら、70才を越える今日まで、第1線で活躍し続け、日本の楽壇では稀有にマエストロと呼ぶにふさわしい風格を漂わせた氏。ブルックナーという、日本の風土と最も遠いと思われる、宗教的、浪漫的作家を、はじめて日本に定着させ、ブルックナーで、ホールを満員に出来る唯一の人の信念は「真摯の中の凡庸さ」にあると思えてならない。

秋のある日、朝比奈さんが熱っぽく語ってくれた、「クラシック音楽の危機なんて存在しません。そんなものが、もしあるとすれば、まさに演奏家自身の中にあるのであって技術的に多少問題があったとしても、本当の情熱と、誠実さでもって、全霊をもって演奏すれば、必ず人の魂を打つ演奏はできますよ。我々が本当に燃え上った演奏をした時の、ベートーヴェンの音楽は、小学生にすら、感動を与えるのです」という言葉を忘れない。

朝比奈氏の、「第九」はまさに、その言葉通りであろうとした演奏であった。「手を抜かないこと」「真摯であること」「誠実であること」を、モットーとし、実践しておられる、朝比奈氏は見事な、アマチュア精神をもったプロフェッショナルといえないか。

いつ聴いても、心洗われる、第三楽章、Adagioを聴きながら、朝比奈氏の、「真摯なる凡庸さ」で、マエストロまで、登りつめた姿勢に祝福の気持でいっぱいだった。その夜、大フィルの友人たちと、彼等の「おやじ」を、また音楽を語り、私は幸福に酔った。

( 島 田 誠 )


## 郷 土 誌 の 窓

有馬道を北へ向かうと、一段と寒さがつづります。神戸のもう一つの顔が山の辺の裾野に広がって、吐く息はもうまっ白です。霜柱が足の下でザクザクと崩れます。2月。今月も何点か目についた郷土の本を紹介したいと思います。

年の瀬の31日の読売新聞に『山田郷土誌』(B5判・671ページ)が三年がかりで完成したことが掲載されていましたのが一番初めに目を引きしました。この本は、有志で結成した「山田郷土誌編纂委員会」が作成したもので、北区山田町の大正から昭和にかけての移り変わりを、民話、伝説、学校の沿革まできめ細かく記録されています。重文の「箱木千年家」「下谷上農村歌舞伎舞台」の歴史も入っていて興味をそそります。定価は6,000円(4月からは8,000円)です。ご希望の方は、北区役所山田出張所(電・ )までお申し込み下さい。

記事はちょっと前になりますが、季節はすでに雪山シーズンですから、この本を是非ご紹介しておきたいと思います。昨年10月26日の神戸新聞紙上に「山男が手作り入門書」というタイトルをつけて『氷の山・鉢伏山の歴史』という本が700部限定で発行されたと報道されています。兵庫の代表的な山の入門書として注目されます。自費で発行したのは、養父郡関宮町の鉢伏高原管理センターの管理人、中村覚さん。本は26×18センチの大判で48ページ。中村さんの話では「中学生でもわかるガイドブックを」と4年間かけてまとめあげた、とのこと。第1章の「氷の山・鉢伏山の歴史」にはじまり、第2章「夏山のすべて」、第5章は「スキー場を支える諸団体」と続き、最後には年表も入っています。700部限定なので、今も手に入るかどうかわかりませんが、中村さんの話では印刷原価の出る1部350円で売りたいということです。お問い合わせは、町観光協会(電・ )か管理センター(電・ )までお願いします。

今年に入って、1月5日の神戸新聞に、神戸YMCAが創立80周年を記念して『限りなき前進を』出版したと報道されています。YMCA運動が神戸に芽生えたのは明治19年ごろで、英語教育や、新しい外国思想の紹介、講演会、音楽会の開催などを続けてきました。この本は、創立記念の意味あいだけでなく、さまざまなYMCA活動の方向づけと、その運動を前進させることをもねらいとして出版されました。B6判・約540ページで1,000部を限定印刷。内容は各項目とも、高齢化、余暇社会を背景に80年代

に欠かせない重要テーマと取り組んでいます。ご希望の方は、神戸市生田区加納町2-15、神戸YMCA 80周年記念出版事務局（電・)までお問い合わせください。

神戸新聞1月10日の15面“ふるさとららら”には6点の図書の紹介がありますが、この中で特に光っているのは『兵庫県保育所の歩み』です。兵庫県保育所連盟が編集したこの本は、1年半の短時日で850ページに及ぶ記録をまとめた、きわめて貴重な本となっています。記事によると、全体の半分弱を県下保育所の現勢にあて、残りは保育事業100年史で構成されているとのこと。この中で、従来定説とされてきた、わが国最初の乳幼児保育が、明治23年、新潟静修学校で行われたとする説に対して、明治19年に神戸で間人（はしうど）幼児保育所が開設された、とする論証が興味を呼びおこします。また、農繁期託児所や戦時託児所の記録も、保育事業史の1コマとして関心を持たれます。定価3,500円、送料500円。ご希望の方は、神戸市葺合区坂口通2、兵庫県福祉センター内、兵庫県保育所連盟までお申し込みください。

(N)

## 言葉について

最近の新聞に、「あなたが美しいと感じることば」についてのアンケートがのっていた。それによれば、「こんにちは」「ありがとう」「さようなら」の挨拶語が、いずれも上位にランクされていたように思う。そういえば会話の中で、言葉の美しさはほとんど失われてしまったのではないだろうか。挨拶語が美しいと感じられる事、それ自体が、おかしいといえはいる。響きや、ニュアンスの美しさもさることながら、その言葉の発せられる状況を、人々は美しいと記憶しているのではないだろうか。

山頂で、ふとすれちがった登山者が、お互いに「こんにちは」と声をかけ合ったり、何気ない親切に明るい声で「ありがとう」と言葉を返されたりすれば、誰でも、その情景を美しいものと記憶するのではないだろうか。

先日、ある会合で、作家の藤本義一さんが、日本語の言葉の乱れについて指摘された中で、この項、店へ子供が100円玉をにぎりしめて、汗をかいて買い物にきても、店員は黙ってぼいと、物を渡すだけだ。1万円も買うお客には、頭も下げ、何度も「ありがとうございます」と繰り返している。言葉の本来の意味が理解されていないから、このような事になる。「有難い」は、本来「たぐいが少ない」「稀なことが起る」の意であり、この交通戦争の時代、子供が独りでこのお店をめがけて、100円玉握りしめて、汗を流しながら駆けてきた事に対して、お店の人は心から「有難う」といってほしい、と話された。

けだし名言である。人々はこうした短い言葉を、美しいと感じる、人々との触れ合いの中で、この言葉を口にするのに、どれだけの努力とエネルギーを消費するというのだろうか。1日中、ほとんど無意味な冗舌を繰り返しているのだとしたら、もっと、こうした言葉を大切に使いたい。



## 80. 釣りキチ アラカルト

海岸線一带の景色も年末から新年当初は、いやに灰色に黯んで流石に釣行も足遠のくこの頃です。例年初釣りは1月2日と決めこんでおり、殆んど釣れたと云う記憶も実績もない、まあ祝儀だとポットのかん酒をちびりちびりと、おとそ気分を満足している次第。松の内、3が日は漁師も休みで自分で船を操らぬ限り船での大漁は到底望めません。ここしばらくは安い餌代の溪流のハヤ(ハス)釣りでもやりますか……。

魚の釣れぬシーズンですが、魚好きの小生はそれでも魚の旬(しゅん)を追ってあちこちと飲み屋を散策し舌の楽しみに懸命でいる一人……。釣りの魚、メ~~ダカ~~、ガンシラ、カレイ、キス、ペラ。からカワハギ、ボン、アンコウ、などはこたえられない味である。女房など市場でいけの魚などと云って高い値に信用し小生を満足させようとするが、釣りの魚とは全く比較にならん。この前も居酒屋で良いモンコウイカのいけづくりだと出された。成る程舌に巻きこむような独特の腰があったが大体においてアフリカ産冷凍ものです。小生も戦時下のフカ、サメ、カエルから始まりタニシ、どじょう、スッポンと、事水棲のいきものは殆んど大小口に入れている。未知のメダカ、ゴンズイ、マンボウなどその調理法とか喰べれる店があれば是非ご教示願いたいと思う(合掌)。

さて、今回中公文庫より改版ポケットサイズで「百魚才時記」なる愉快な本が復刊された機に、日常なじみの多い季節の魚から紙面の都合もあり、以下少々列記してみました。食通のみなさん失礼ですが魚名を一発で判読できますか?小生など寿し屋の湯呑みであれこれ考え想起こす中ににぎりのお替りで予算超過しばしばです。では又……。

(清水晏禎)

1. 鱈 (秋のサンマを紳士になぞらえ、スマートな春の淑女。くちばし細く水面を泳ぐ。)
2. 鱈 (高級魚で体長1米になる。味噌漬、照焼きに上々。)
3. 蛸 (〇〇の八ちゃん、鉢巻きの所は実は胴で頭は足の根、目玉のところ。水蛸は父親が交合して海底にて死に至り母親は子を3ヶ月育てすぐ死を追う。)
4. 鱈 (幼魚から名が3度変る。夏が旬で洗いは最高。河口に多い。)

5. 旗魚 (ヘミングウェイ「老人と海」で有名。体長3米の暴れん坊、外洋産。)
6. 鱈 (尾にトゲがあり刺されると肉がくさり死にもつながる。海底魚だが春は沿岸にも接近する。くわばら。)
7. 鮫 (喰べた事がないが味噌汁、天ぷらに琵琶湖方面で有名美味。これがあばれると地震云々……。)
8. 鱈 (大衆の食膳にほど遠い瀬戸内海水深60米ぐらいの深海魚で一番値の高い魚ではないか?アコウとも別名が。)
9. 鯨 (5月産卵期には大群でギギ、ググと大合唱、船釣りでよく釣れるが旨くない。)
10. 鰯 (カツオと何のゆかりもなし、クラゲを常食とする南方魚だが黒潮にのり初夏に沿海へ。高級魚で美味。)
11. 鰯 (冬になると海に下り夏になると川にのぼるイナセなあんちゃんて親名がこれ……マスク良くない。)
12. 鰻 (関西では本マグロ格。夏から秋の刺身に珍重がられている。)
13. 番羽車魚 (平和を好む武器なき主義者。卵は2億以上も生むがカジキなど南洋で喰われ静かに優しく死んでいく。)
14. 鱈 (冬正月なじみの高級魚。昔とちがい養殖ものが年中出廻り脂こくなった事が残念なり。)
15. 柳葉魚 (昔はアイヌ人だけの常食とか云われている。北海道での味は忘れられない。子持が旨い。)

1. (サヨリ) 2. (サワラ) 3. (タコ) 4. (スズキ) 5. (カジキ) 6. (エイ)
7. (ナマズ) 8. (ハタ) 9. (イシモチ) 10. (マナガツオ) 11. (ボラ)
12. (キハダ) 13. (マンボウ) 14. (ブリ) 15. (シシャモ)

# 海文堂・2月のフェア

## ご案内 (1階書店もおしめのコーナーにて)

2月に入りました。今年は四年に一度のうるう年ですので、29日まで。各地のスキー場はようやく雪も入って賑やかになってきたようです。もう見つけましたか「ミス・ゲレンデ」。

さて、海文堂の2月のフェアは、

### 入門から応用まで—カメラと写真の招待席 (仮称)

です。カメラの技術書や写真書をたくさん集めてみました。心ゆくまで、レンズを通して描いた人間の心をご覧くださいと思います。カメラのことを、もっと深く、広く知っていただけるものと信じて企画いたしました。以下、展示書籍の一部を紹介いたします。

「写真基礎技法」 美術出版 1800円

「写真の思想」 美術出版 1800円

「写真昭和50年史」 朝日新聞社 2000円

「写真作法」 ガヴィッド社 1500円

「秘密のカメラ術」 ロングセラーズ 680円

「生きている広島」 築地書館 4800円

「写真暗室入門」 大泉書店 950円

「新アサヒカメラ教室」(NO.2~6) 各1500円

「写真小事典」 講談社 500円

「135人の女ともだち」 小学館 2800円

「プレイメイト312」 集英社 2800円

「カメラ大図鑑」 毎日新聞社 1200円

「写真選書」1~15 朝日ソノラマ 各1800円

「エウロパI・II」 ブロンズ社

「大和路」 朝日新聞社 17500円

「姫路城」 朝日新聞社 2800円

「日本の山」 山と溪谷社 3800円

「世界の山」 山と溪谷社 4800円

「写真の読み方」 岩波書店 320円

「フォトハンドブック」 マール社 2950円

「シリーズ・日本カメラ」のB.N.多数

「特集フォトアート」のB.N.多数

「現代カメラ新書」の既刊書多数 etc.

是非ご覧ください。

# 校正クイズ

「校正おそろべし」とか、「赤えんぴつ」(正・統)などを書かれた加藤康司さんの、「赤えんぴつ四十年」という本を読んでいると、文字にまつわる面白い話がいっぱい出てくる。文字の間違いばかりとは限らないが、すこし、ここに紹介して、今号のクイズに替えたいと思います。チャレンジしてみてください。

1. ぼくの許婚(いいなづけ)は田舎にいる由緒ある床屋の娘です。
2. 春蓮院の庭の池に、ひっそりと浮かんでいた水蓮の花が忘れられない。
3. 節子にとって、今晚のおかづを極にするが、ということが、1日のうちで一番頭をなやます問題であった。—節子の家にはがま口は一つしかない。上手に使って手早くしないと内職のミシンを踏む時間がなくなる。
4. 春すぎて 夏来にけらし 白砂(は)に 衣ほすてふ 天の香具山 (万葉集)
5. このごろ、日本人も長命になって、七十八古来稀ナリシモ、近來ザラナリというわけだが、さすが八十となると…
6. 大宮、浦和、松戸、市川などの東京の衛星都市は、最近とみに発展している。
7. 今年の幹事役には、大村君に白刃の矢が立った。
8. 生ける底を書いたトルストイ…
9. XX町三丁目のうどん屋から出火、天井を焼いただけで鎮(は)火した。
10. 書店では、燧下親しむの候になると「読書週刊」というのを設けて増売を図るけれど、読者はそんなものに、おしそれとつりてはこない。
11. 栞野原おんな敷けこむ日をまどひ (俳句)
12. 中学校の保健体育の時間に人口呼吸法について習った。
13. 夏休みに、キマダラルリツバメ鳥をつかまえた生徒がいた。

さて、上の文章を、校正者の身になって校正してみてください。各項の文章に一つは、間違いが含まれています。

——どうですか全部できましたか。次の真砂と誤植の数は……とやら。なかなか難しいものですね。

## 解答

- 1) 許婚 → 許嫁・多分付 床屋 → 庄屋
- 2) 水蓮 → 睡蓮
- 3) がま口 → がま口
- 4) 白砂 → 白砂(は)
- 5) 七十八 → 七十八(は)
- 6) 衛星 → 衛星
- 7) 白刃 → 白刃
- 8) 底 → 屍
- 9) 天井 → 天井(は)
- 10) 燧下 → 燧火・候 → 候
- 11) お → を、又は、ひ → い
- 12) 保健 → 保健 人口 → 人工
- 13) 鳥 → 蝶